

構築会兵庫支部 平成8年度見学会の概要

平成8年度の見学会は、明石海峡大橋と阪神・淡路大震災の引き金となった野島断層を訪問しました。梅雨のさなかの開催で、時々雨が降るあいにくの天気でしたが34名の参加となりました。

橋長3,911m、中央支間長1,991mの規模を誇る明石海峡大橋は昭和63年(1988年)に着工、両主塔が立ち上がってメインケーブルの架設作業中に阪神・淡路大震災が発生しました。地震による構造上の損傷はなかったものの、地盤が変位したことによって支間長が約1m伸びています。その後、補剛桁の架設が開始され、見学会当日は閉合まで約200mを残す状態でした(9月18日に補剛桁閉合)。ビデオによる概要説明の後、本州四国連絡橋公団の船に乗せていただき、舞子側橋台(1A)から岩屋側橋台(4A)までのミニ航海です。雨の合間を縫ってデッキから雄大な姿を間近に眺めながら、世界一の吊橋の一日も早い完成を願いました。

野島断層は、京都大学大学院地球惑星科学専攻の竹村助教授を現地講師としてご案内をお願いし、興味深いお話を伺うことができました。江崎灯台では、石段に右横ずれ変位1.2mの痕跡が生々しく保存されていました。梨本地区では、地表面下数百メートルから取ったボーリングコアに、過去にも活動したことを示す薄茶色の断層粘土とともに、今回の地震による黒い新鮮な断層粘土を見ることができ、地震力の強大さを改めて実感しました。小倉地区では、南東側上がり0.5m前後で、明確な低断層崖が200m以上にわたって出現しており、一部がビニールハウスで覆われ保存されています。また、付近には塀は破壊されたものの、地震断層が北東角をかすただけであったため大きな被害はまぬがれたコンクリート造の建物が建っていました。この辺り一帯は、野島断層を保存展示する記念公園として、兵庫県と北淡町が共同で整備することとされています。

見学会に引き続き、午後5時から明石海峡大橋を間近に臨む松帆の浦で懇親会を開催しました。土木工学教室から中辻先生、建築工学教室からは学科長の橘先生をご来賓としてお迎えし、教室の近況を報告していただきました。震災当事の様々な苦労話やそれ乗り越えて工事が進められる明石海峡大橋の話題などの話が弾んで名残の尽きない中、淡路島での開催ということもあって早めの散会になりました。